

五月一日(土)午後一時より

於 京大文学部第一教室

小中心集落の構造

西村 睦男氏

近年施行された町村合併は、明治期に施行されたそれにくらべて、都市(中心集落)を中心とする合併が多かったことを特色としている。これは、交通機関の発達にともなう、商業・金融・行政・サービスなどの中心機能がますます都市に集中し、都市と農村との結びつきが、きわめて強くなってきたからであろう。この傾向は、今後さらにその度を加えていくものと思われるから、現在編成されている行政区画が妥当なものであるかどうかを、ここで検討しておく必要がある。

中心集落を核にもつ行政区画の設定法として、ここでは商圏をとりあげてみた。商圏設定法として最も理想的なものは買物調査であるが、その資料をととのえるのは容易でないから、より簡便な方法で設定する

ことを考えてみる。その方法は、次のとおりである。いま、 $A \cdot B$ 二つの中心集落の勢力が $\rho \cdot \sigma$ の比の関係にあるとすると、 A と B の境界は、アポロニウスの円の定理を応用して、 $A \cdot B$ からの距離の比が $\sqrt{a} : \sqrt{b}$ の関係にあるの点軌跡となる。この軌跡は、 A と B の勢力を $\rho \cdot \sigma$ とすれば、 B のがわにおいて描かれる円となり、この円内が B のエリア、円外がすべて A のエリアとなる。ところで、ここで問題になるのは、中心集落の勢力の求め方であるが、その方法として、中心集落のベーシックな活動量を算出して、これは、基本的には立地係数 (Location Quotient) の概念を適用して算出したものである。

このような方法にもとづいて、山口県の各中心集落の商圏を設定し、それを買物調査によってえられた結果と比較してみた。その結果、中心集落のオーダーと、位置によって、商圏が構成され、それにもとづいて行政区画の再編成が必要であることがわかった。

(西村)

イラン・アフガニスタンの農村生活

末尾 至行氏

これは一九六四年の京都大学第五次イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査に、応地利明氏とともに、地理班員として参加した際の調査の概報である。今次の調査目的は、乾燥地域での農牧業・農村の実態を知ることにあつた。その目的に応じ、一方では可能な限り行程を広くにして広域なデータの蒐集をはかり、他方では若干の農村を選択して農家経済・家族構造に至るまでの、農村社会経済構造に関するデータを採集した。八月五日から九月三日までは、カラチを出発してハイバル峠に至る西パキスタン国内の旅行に費した。うち八月九日から十三日までは、インダス平原に立地するシンド地方のダムラハー村(ラルカーナ近郊)に滞在し、カルワール部落について集約的な聴取調査をおこなった。インダスの運河灌漑による米作を基盤とした村である。また、ハイバル峠に到達する以前に、クウェタ、スワート、チトラル、デイルも訪れた。いずれもインダス平原の範囲をこえた高原、山間の農村地帯である。ついでア

フガニスタンの滞在は、九月三日から十一月五日まで、二カ月余に及んだ。当初九月十七日から十月二日までの十六日間は、ヒンズクシ山脈以北の、いわばトルキスタン平原の南縁に位置する、アブドゥラハイ村（クンドゥズ近郊）に定着した。クンドゥズ川から引水する用水路によって養われ、綿、メロン、スイカ、米、小麦、アルファルファ等を栽培するタジック族の村である。隣のタジックとウズベックが混住するコルバンザール村とあわせ、約五十戸の農家について個別調査をおこなった。そのあと、クンドゥズから西方へライトへ、ライトからヒンズクシ山脈を東へ縦断してカプールの道へライトへと、アフガニスタンのほぼ全域を踏査した。特にヒンズクシ縦断の経験は貴重なものがあつた。最後にイランの旅行は十一月五日から十二月二十九日まで約二カ月に及んだ。うち十一月二十九日から十二月十二日までの二週間は、テヘラン東方一二〇キロのアミラバード村（ガラムサル近郊）に滞在した。エルブルズ山脈南麓の溪流分岐による河川灌漑の村で、イラン高原の村の典型である。綿、メロン、

小麦を主作とし、三圃制をとり、近時の農地改革前まで二人の大地主によって所有されてきたその形骸を、未だ生々しくとどめている。この滞在の前後にはゴルガン、ギラン、アゼルバイジャン、ルースタン等を踏査した。

今次の調査では調査目的にそつて、農村生活を対象に八ミリ映画を撮影した。今回の発表では表題にそつて「アフガニスタンの村」、「晩秋のイラン」の二巻を上映し、犁耕、脱穀、放牧、レンガ造り、番水作業などの模様を紹介した。なお調査結果の詳細はおつて別に出版する予定である。（末尾）

六月例会

六月五日（土）午後一時より

於 京大文学部第一講義室

最近の宮址発掘調査報告

一、長岡京の発掘調査 中山 修一氏

（発表内容は、論文として、近く本誌に掲載予定）

二、平城宮の宮域の問題 工藤 圭章氏

平城宮跡の発掘調査は奈良国立文化財研究所によって引続いておこなわれており、



東面中門外の遺構群

現在第二十七次の調査が進められている。最近の調査は宮域の範囲を確認することに主力をおいた調査であつて、南面中央の朱雀門をはじめ、平安宮では陽明・待賢・談天・藻壁の諸門に相当する、東面の北門・



東面北門外の井戸・泉屋

中門、西面の南門・中門の五門とその周辺が発掘されている。朱雀門や西面の両門については、推定した位置で門基壇の基礎地業が検出され、これらの門は五間三戸の門であったことが判明したが、東面ではまだ明瞭に門と認められるような遺構が発見さ

れていない。宮城東面の調査では、さらに東一坊大路と推定される地域も調査したが、大路の位置で諸遺構が発見され、今まで方八町として知られてきた宮域について、新しく問題が生じてきた。ここでは東一坊大路の調査の概略を報告して宮城の問題を述べたい。

東面北門外の調査では、一坊大路東辺で掘立柱建物、中央で井戸・泉屋とそれらの排水溝が発見されている。井戸の南部では土壙から百点におよぶ木簡が出土したが、この中には米・酒に関係するものや造酒司の名が記載されるものがあり、それらは出土層位から考えると井戸・泉屋と同時期の木簡になる。紀年銘のある木簡から検討すると、これらの遺構は少くとも神龜末年には存在していたようであって、造酒司に係するものでないかと推定される。

東面中門外の調査では両側に南北にとおる溝を設けた大路の中央で、井戸とその四周を長方形に囲む玉石敷の溝が発見され、またこの北部で南に孫庇のある七間五間の掘立柱建物と五間三間の掘立柱建物が併列して発見されている。したがって、これらの建物が存在した時期には大路としての機

能はなかったものとみられる。ところでこれらの遺構の時期は平城宮創設当初からかどうかは明らかでないが、大路中央で発見された建物は時期が遅れるようである。左京二条二坊一坪に相当する地域の一部も調査され、ここでは三間一戸の門と施釉された塚が出土している。この地域は一・二・七・八坪の方二町が台地状を呈し、重要な遺構の存在が推定される。「統紀」にみえる東院玉殿と関連するものであろうか。

以上宮城の東辺の調査では一坊大路の位置に多くの遺構が存在することが明らかになった。宮城整備に伴って官衙が宮域外にもたてられるようになったのであろうか、あるいは宮城が方八町以上あったか問題である。東の法華寺と宮城との間の地域、この場所は平安宮では諸官衙の町がある場所であるが、いずれにせよ平城宮でもこの地域は宮関係の場所であったと推定できようである。東面の諸門は今後の調査で位置が明らかになるであろうが、現在では、八世紀後半において宮城東辺の一坊大路が路としての機能を停止したことは間違いない事実として知られるのである。

(工藤)

学界消息

最近の古墳調査

1 將軍山古墳

地名 大阪府茨木市安威

調査者 茨木市教育委員会

期間 石室の調査と移転 昭和三十九年八月

一日より九月一〇日

墳丘および周辺の古墳 昭和三十九年

四月二六日より六月二〇日

一 竪穴式石室 以前小林行雄博士の調査された際、未調査になっている部分を調査した。石室は、古墳の主軸と直角の方向に、長さ約六・五m、幅約一m、高さ一・五mの底部に粘土床を有する竪穴式石室で、側壁は結晶片岩を積み上げ、天井石は大小二枚の石英閃緑岩と硬砂岩を用いている。粘土床と側壁の間から鉄鏃・銅鏃・刀子などが若干出土した。なおこの石室は、当古墳の北側の鎌足古墳とよばれている横穴式石室墳の西側に移築されている。

墳丘 全長約一〇m、後円部径約八〇m、前方部幅約四三mの前方後円墳、前方部は三段に築成されている。葺石はよく残

っており、各段とも最下部には大きい栗石をおき、それに沿って小さい石を上に向って葺いていた。上段・中段には円筒埴輪列くびれ部では、茶臼山式土器の底部を原位で確認した。なお、朝顔形円筒埴輪以外に動物埴輪の一部が検出された事が注目に値する。

周辺の古墳 前方部の墳丘外側で後円部石室と同種の石材を使用した小型の箱式石棺（長さ約八〇cm・幅三〇―四〇cm）が遺物を伴わずに発見された。また前方部の前方に三基、後円部の北西に一基、計四基の横穴式石室を有する小円墳が調査されたが、いずれも盗掘をうけて破壊いちじるしく、須恵器・装身具・馬具などを若干出土したにすぎなかった。

2 藤の森古墳・善上山古墳

大阪府南河内郡美陵町野中

大阪府営ポンプ場建設によって破壊される

二古墳の事前調査である。大阪府水道部の委託を受けて、西谷正らが、昭和四〇年二月一五月から三月三〇日まで行なった。

藤の森古墳

応神天皇陵の陪塚である。直径約二四m、

円墳で周囲には幅約四mの濠をめぐるしている。墳丘には斜面に葺石が葺かれ、裾には円筒埴輪がめぐらされている。墳頂部には形象埴輪もあつたらしく、家や楯の埴輪が採集できた。約三mの高さに盛土され封土内から、南に開口する横穴式石室が発見された。板状片岩でできた石室側面には赤色顔料が塗布されていた。玄室長さ約三・五m、幅約一・五m、羨道幅約一m、羨道長約〇・八〇・九mの規模で、高さは約一・五mまで、持送りながら積まれている。石室内はすでに盗掘されていたため遺物は完全な形では検出できなかった。それでも、鉄釘、鉄鏃、鉄刀子、短甲、ガラス玉、ガラス製勾玉、金銅製三輪玉などが発見された。盗掘の際に掘り上げられたと考えられる轡が墳丘斜面から採集できた。年代は、遺物の整理後でなければ正確なことはいえないが、5世紀代であることは明らかである。

善上山古墳

藤の森古墳の西方約五〇mのところにある古墳である。墳丘は直径約二四mしか現存していなかったが、円墳か方墳かを確認するために、周囲を調査した結果、全長約

五三 m、円形部径約四〇 m、方形部幅約二六 m の帆立貝式古墳であることがわかった。周囲にはさらに幅約四 m の塼をめぐらしていた。中世以前に古墳が破壊され、周塼が埋め立てられたもので、その時に内部主体は完全に削平されたらしく、現在残る墳丘内からはなにも発見できなかった。

埋め立てられた壕内には、古代から中世に及ぶ遺物とともに土器類が混入していたほか、埴輪が多数採集でき、リソゴ箱四〇杯位の破片を得た。埴輪のなかで、著しいものには、巫女埴輪三個、蓋四個、家一個、楯一個、冑・肩甲・短甲を装備した武人埴輪二個などがあつた。

年代を推定させるものは埴輪だけであるが、5世紀代の古墳であることはほぼ間違いない。位置的にも、規模が大きいことなどから、独立した古墳で応神陵の陪塚ではないだろう。

3 塚原古墳群

大阪府高槻市塚原は Gowland によって初めて紹介されて以来、梅原末治博士によつても注目され、大阪府下にこの数少ない古墳時代後期の群集墳であり、現在ま

でに九〇基礎確認されている。ところが、最近の宅地造成や研究所建設などで一部が破壊されることになったので、昭和三十七年三月～三十九年二月の三年にわたつて高槻市教育委員会の主催で、西谷正が担当した事前調査が行なわれた。その結果、一基発掘されたが、とくに塚原三九号墳では、石室築造の際の墓壙や周塼が明確にされた。

塚原四二号墳では、石室の解体作業と並行して、石室構築法が追求され、古墳の築造法がかなり明らかにされてきている。塚原三九号墳は茨木市見付山古墳と石室プランが一致している事実や、塚原三九・四二・三六号墳・見付山古墳のそれぞれの間には石机架構法が酷似していることなどから、そこに専門の墓作り集団の存在を推定させるようになってきた。

塚原八八号墳では、玄室内の底面に円筒埴輪や馬形・家形埴輪を割って敷いていることがわかつた。埴輪の意義が全く失われているわけである。また、羨道から外へ導かれる排水路も発見された。出土品については、明治以来の石材採取を目的とした盗掘で、石室内部が、いちじるしく攪乱され、完存していない。

それでも、多数の須恵器のほか、馬具・滑石製紡錘車・水晶製切子玉・埋木製算盤玉・碧玉製管玉・ガラス製小玉・金環・銀環・鉄剣・鉄刀子・鉄鏃・鉄鎌などが検出されている。6世紀後半から7世紀初葉の年代のもの。

4 塚穴山古墳

地名 奈良県天理市勾田
調査者 主催者 天理大学、担当者 近江昌司・白木原和美・西谷真治・金関恕
期間 昭和三十九年九月十日～四十年二月一日
遺構 径約六五 m、現高六米の円墳。幅約一三・五 m の周塼の一部が残る。主体は全長一六・五 m の大きな横穴式石室で、玄室の長さ七 m、幅三 m、羨道は両袖式で幅二・六 m。天井石はすべて失なわれていたが推定高約三米。石材は巨大な花崗岩を使用する。玄室の床は大形の平石を敷きつめ、その下は暗渠となつて、羨道の中央部を通じて濠に通じている。玄室から凝灰岩製の組合式石棺の残片が発見された。
遺物 銀線巻鉄刀柄破片一、鉄鎌一、土師器壺二、土師器高杯一、須恵器壺二

年代 七世紀

その他 墳丘内から中世の火葬墓数基、および室町時代末期に古墳の石材を利用してつくられたおびただしい石塔類が出土した。

5 金比羅山古墳

地名 京都府宇治市広野町

期間 昭和三九年八月二日より十月一七日まで

調査者 京都府文化財保護課主催、吉本亮俊担当

宅地造成による破壊のため事前調査として行われたものである。

墳丘は径約四〇mの円墳で、半周する外周は墳丘と東側の背後の丘陵とを隔ている。墳丘には葺石がしかれ、その最下段に沿って埴輪円筒列が墳丘を一周している。更に西側では、直線的な配列をもつ約三〇個の埴輪円筒列がある。

第一塚 埴輪平坦部の中央に位置する全長約八mの粘土塚。棺内には、径一・五・七の舶載の斜縁二神二獸鏡（銘「吾年明竟自有紀令人長命宜孫子大吉」と玉類（硬玉勾玉・碧玉勾玉・碧玉管玉・ガラス小玉）、棺外粘土中より、櫛・鉄器類約五〇点が出土した。

第二塚 第一塚の西側に壙を接して位置。

壙底周縁に排水溝を設けているが外部には通じていない。粘土塚中に埴製円筒棺を埋置している。棺は、突帯による綾杉文様をもつ長さ一・六三m、径五・五cmの円筒部の両端に、高さ二・五cm、径六〇cmの半球形の蓋を加えたものである。棺内より碧玉管玉、棺外粘土中より鉄製農具類約三〇点が出土した。

埴輪棺 墳丘裾部の埴輪円筒列中に二体、北側外壁上に一体、以上三体出土した。いずれも埴輪円筒あるいは朝顔形埴輪を転用したもので、長さも一m前後、遺物や人骨は全く見られない。

6 坊主山一号墳・二号墳

地名 宇治市広野町寺山

期間 二号墳 昭和三九年五月一日～六月二三日 一号墳 八月二六日～九月一六日

調査者 京都府教育庁文化財保護課 堤圭三郎担当

一号墳は宅地造成、二号墳は墓地拡張による破壊のため事前調査がおこなわれた。南北に走る洪積丘陵の東から西へのびる海

抜五十mの一支脈に、東から一号墳（前方後円墳）、二号墳、三号墳（円墳）と並び、南の金比羅山古墳と一群を形成する。

〔一号墳〕全長四五m、後円部径二七m、前方部幅一八mの西面の前方後円墳で、一段の円筒埴輪列が墳丘裾を圍繞する他、墳丘上から人物埴輪（手）形象埴輪（鶏頭）が検出された。

第一塚 後円部に長さ三・六m、幅六〇mの二本の蟻椀を有す組合式木棺が、壙を設けずに埋置されていた。木棺は墳丘主軸と六〇度の方向にあり、南枕である。（三m）棺内からは、金環・碧玉製の勾玉と管玉・水晶製の切子玉と丸玉・ガラス製の丸玉と小玉・銅釧・鉄斧・直刀・金銅製三輪玉・胡録・鉄鍔、棺外からは子持付壺・壺・銅鈴・鉄矛と石突・馬具（鉄地金銅張香葉など）が出土した。年代は六世紀前半と考えられる。

第二塚 更にブルドーザーによる削平中、後円部東斜面から、第一塚と直角の方向に厚一〇cmの白砂を床として敷いただけの簡単な埋葬施設が見出された。埴等の須恵器の副葬品から、年代は六世紀後半と考えられる。

〔二号墳〕現存径二三m、高さ三mの円墳で、葺石埴輪等は存しない。墳頂部に主軸を南北の方向に持つ埋葬施設が、東西に並んで二柳検出された。

西柳 上底部五・六m×二・四m、下底部四・六m×一・九m、深さ二・二mの壙内に木棺を埋置して後、灰色土褐色土を交互に積み重ねている。三本の蟻椀を有す組合式木棺は、木口に蒲鋒型粘土塊がつめられ、それにより全長三・三m、幅八〇cm、高六〇cmという木棺の規模が判明する。副葬品は、須恵器（合付長頸壺・提瓶・甕）、金環、直刀、鉄鏃、刀子、装身具と思われる金銅板があった。棺外遺物に杯がある。遺物の位置より北枕と考えられる。なお北側粘土塊が北方に行くにつれ、河原石を上に敷き、高くなって土壙壁面に続いていた。

東柳 長さ五m、幅二m、深さ〇・五mの壙内に、長さ三・〇m、幅〇・七mの組合式木棺を埋置した土壙墓である。棺床北部には、甬二体分と各々に伴う銅環と硝子製小玉を綴る鉄環各一對が出土した。北枕の二体合葬の一体は女性と判明した。人骨片の他に、硝子製小玉・土製丸玉・漆膜の付着した鉄鏃一括・有蓋埴の副葬品が存し

た。北側と南側に須恵器（埴・坏・有蓋高坏）、馬具（鍔具・鎖）が埋置されていたが、壙中に土を埋め戻す際の祭祀に用いられたものであろう。墳丘封土中、広範囲に大形壺・壺・器台・高坏・坏等の須恵器の破片が散在していたが、埋葬後の祭祀に用いられたのであろう。両柳とも六世紀後半と考えられるが、須恵器の形式から判断すると、僅かに西柳が先行する様である。

7 掘塚古墳

地名 京都府久世郡城陽町平川
調査者 主催者 京都府教育委員会、担当
者 西谷真治・白木原和美・近江昌司・堤
圭三郎

期間 昭和三十九年七月十六日～二十三日
遺構 久津川車塚古墳の北西六〇米に位置する方墳。二段に築成され、一辺の長さ三二m、復原高約四m。裾は約〇・六mの高さまでクリ石をもって葺かれている。墳丘の東半が削平されたため、主体部はほとんど破壊されており、千枚岩質頁岩をもって構築された堅穴式石室であることがかろうじて知られた。石室は盛土にあらためて浅い墓壙を掘りその内部につくられたもので

ある。

遺物 滑石鎌三、不明品一、鉄製小形鍔一以上、鎌六以上、鉈四以上、穂摘鎌一以上、刀子三一以上、鈎状工具五以上（鉄製品はすべてミニチュア）、埴輪（家、蓋、盾、靴）破片
年代 五世紀

8 長池古墳

地名 京都府久世郡城陽町寺田上ノ芝
調査者 主催者 京都府教育委員会、担当
者 白木原和美・西谷真治・近江昌司・堤
圭三郎

期間 昭和三十九年八月六日～十八日
遺構 平野にのぞむ丘陵の末端に位置する。墳丘は東西の方向をもつ前方後円にちかい形をしているが、人工的に整形されたものか否かは疑わしい。東西約五〇m、西側の後円丘にあたる部分の径三〇m、高さ六m、東端の幅一・四m、西側墳頂と東側低平部の比高は約三m。主体は西側墳頂に二基（第一、第二主体）、東側低平部に一基（第三主体）あり、いずれも南北の方向をとる。第一主体は地山を長さ一・五m、幅〇・四五mの大きさにわずかに掘りくぼめ、内部

および周辺に白色粘土を敷いたもので、粘土面には朱が塗布されている。第二主体は第一主体の東側に接し、これを一部分切断してつくられた、長さ約5m、幅約2mの不整な長方形の壙である。両者とも墳頂の削平および盗掘によって、正確な構造を知ることができない。第三主体は地山を掘りこんだ長さ4・5m、北端の幅一・8m、南端の幅一・5m、深さ約〇・9mの壙で、完全な状態で遺存していた。

遺物 第一主体 須恵器卍一（内部）小形銅鏡一、碧玉管玉二、土師器高杯破片（外部）第二主体 金鏝二、銀空玉二、銀空玉一、琥珀玉一六以上、瑪瑙小玉一、須恵器蓋杯五、壺一、卍二、第三主体 銀環二、鉄刀子一、鉄鏃八、須恵器台付壺二、卍二、蓋杯九、土師器壺一（以上内部）須恵器杯四（壙の北辺）
年代 六世紀

9 御堂ヶ池群集墳

地名 京都市右京区梅ヶ畑向地町

調査者 京都府教育委員会、堤圭三郎担当
宅地造成、道路敷設による破壊のために調査がおこなわれた。

全部で二二基あったと推定される中で、保存の確定していた第一号墳を除き、調査をおこなうことのできたのは六基である。

いずれも径一〇m前後の円墳で、内部は比較的小さい石材を用いた横穴式石室である。六基ともすでに盗掘をうけて天井石をすべて失い、内部攪乱の痕跡がいちじるしかった。遺物は、須恵器・装身具・釘・刀子などの他に、若干の人骨が残存していた。

構築上注目には値するのは第一三号墳である。これは、径約一三mの円墳で、内部には全長六・七mの両袖式石室があったが、その羨道部の側壁が外方に向けて延長され、左右に八の字状に開いて連続していた事である。その長さは約二m、二々四段に石を積み重ねた高さは約一mで、石室の側壁と異なり、最下段の石から少しずつずらして階段状に横積みにして、壁面としては傾斜を示していた。羨道入口部を明確にし、入口部の左右の墳丘の裾を割るものであろうか。墳丘を圍繞する痕跡は認められなかった。

なお、この群集墳中最大の規模をもつ第一号墳はそのまま保存、第一三号墳は第一号墳の隣接地に石室のみを移築した。